

# 付 属 教 育 の み ち

学 校 長 広 岡 亮 蔵

## I 中等教育のゆがみ

いまの世のなかには、愚かしいことだが、しかし一寸にはどうともならない困った問題事態が、いくつかある。中学や高校における受験教育は、その最たるものの一つである。

入試問題は年ごとに難問化していく。大きさにいえば、数年まえの難問は、もはや今年の難問ではなくなる、というほどに難かしさの水準があがっていく。数年まえの大学入試の難問にたいして、予備校を先頭とする有名高校が、これを突破する受験テクニックをみつけだして、これを生徒に伝受するからである。こうして大学と高校とが、試験問題を難かしくするためにイタチゴッコをしているということができる。だからこんにちの入試問題は、技巧とテクニックの方向における難問化を重ねようとしている。たとえば考える数学ではなく“記憶する数学”というようになっていくだろう。つまり、生活にとってはほとんど意味のない、技巧的で難解な問題が、入試の王座をしめていくであろう。

生徒は、有名大学の狭い門を突破しようとして、物すごい勉強をする。毎晩、夜中すぎまで机にかじりついて勉強する。疲労の度を通りこした過労のために、若い元気な身体も日ごとに蝕ばまれていく。受験という一点に集中するがゆえに、広い豊かな人生にたいする感受性を失って、片執症にちかい暗い頑かな性格ができてくる。さらに困ったことには、生徒の相当部分が、この厳しい受験苦行に追従できないで、脱落して暴力とセックスに若い生きがいを、見いだそうとすることである。時おり新聞紙上で表沙汰になる非行生徒は、じつは氷山の一角にすぎない。

まことに困った高校教育、それから中学教育である。困ったと感じつつも、日毎にこれを重ねざるをえないのが、わが国の中等教育の一般現状である。しかしこの方向が増長していくなれば、受験の狂騒は、国民を精神的に空中分解させてしまうことになりはしないかと危惧される。健やかな人間の心情、物ごとを考えようとする英知的な知性、事態のよいありかたを見いだそうとする洞察力、人生の真実をもとめ実現しようと

する高らかな精神。こうしたものは日ごとに磨りへらされていく。そして生ま吞みこみされた知識、技巧的な知識、頭の表皮にだけ止どまって性格の奥にまでとどかない知識。こうしたいわば雑物に近いものが、狭い頭のなかにはちきれんばかりに詰った、見苦しい不具な人間が出来てきはしないだろうか。

世のなかには無駄ごとがたくさんあるものだが、いまの中等教育も下手をすれば、その最たるものの一つになるかもしれない。“教育における浪費”ということだが、最近の私の頭のなかをしきりに去来する。かなりの費用をそそぎ、多くの時間をかけ、恐るべき労力を投入して、人間をいわば不具者にする教育であるとすれば、それはたんに浪費というだけではすまないかもしれない。

## II 付属学校は必要か

中等教育のこのゆがんだ状態にたいして、付属学校はいったいどういう構えをとるべきであろうか。

付属高校がその特殊条件を利用して、選抜試験によって上位生ばかりを集める行きかたも可能である。こんにちの教育事情では、おそらく十倍という応募者が集まるであろう。この狭き門が一つの渦巻の中心となって、その地域ぜんたいに、はげしい受験準備の波が波及することにもなる。激れつな競争試験のつばせりあいの結果、きわめて優秀な生徒が入学してくる。付属学校の教師はがいて優秀であるから、これらの優秀な生徒たちに優秀な指導をする。そうすれば当然の結果として、一流大学にどんと合格する。これが世の評判となって、付属学校にはますます優秀生が集り、ますます大学入試にすばらしい成績があがっていく。おそらく、全国的な評判をとることも可能であろう。

こうした行きかたの付属学校は、はたして存在する価値があるものだろうか。現代の中等教育は、そうでもなくともかなりなユガミを受けている。このユガミにさらに輪をかける役割を、少なくとも結果的に演じるような付属学校は、そもそも、存在する価値があるものだろうか。私は、そういう付属学校なら無いほうが

ましであり、そういう付属学校なら極言すればやめてしまふべきだと考えたい。

近代の学校教育史をふりかえってみるに、付属学校は教育の進歩にたいして、いろいろな貢献をしてきた。しかしその反面において、入学試験がむつかしくなるにつれて、しだいに優秀な生徒だけが集まる学校となり、特権学校としての付属の伝統ができてきた。積もりに積もった伝統の力は根づよいもので、世人も当事者も、あまり不思議に思わなくなってしまう。さすがに敗戦直後は、特権学校としての付属にたいして、かなり反省が加えられた。しかしそれも束の間のことで、さいきんは旧来の伝統がかなり強く復活しつつある。これにつれて心ある人々には、付属学校の存在を疑う気持ちが生れてきつつある。

私たちは、付属学校の存在は必要である、との確信に立っている。しかしそれは、無条件に必要なのではない。現代の中等教育がもっている諸問題、ことに受験教育によるユガミにたいして、よい打開の道を探究し、中等教育のすぐれたあり方を打ち立てようとする意図と体制がとられているとの条件において、はじめて付属学校の存立が必要であり、その存立にたいして情熱をもつことができるのである。付属学校は、特権と栄華のうえに安き眠りをむさぼるべきではなく、教育の難問に正面からとりくみ、苦悩の十字架をみずから背負うべきである、と私はかんがえたい。私たちの教育的な知性はあるいは暗く、教育的な力はあるいは弱いかもしれない。しかし教育的な良心においては、ユガミがあってはならないとおもわれる。

ここで、上級校への進学および就職にたいする私たちの態度を、明らかにしておく必要がある。進学できなくともよいとか、就職できなくともよいとか、そんなつっ走った理想論をふりかざすつもりはない。いやむしる積極的に、できるだけ多くのものがよい成績で進学し、就職してほしいのである。進学についていえば、中学は高校に、高校は大学にと滑らかに接続することは、私たちの大きな願いと努力点である。この願いが、ゆがんだ体制と付焼刃の努力によってではなく、ただしい体制と豊かな根深い能力の形成とによって、つまり教育のロジックにおいて、それを実現したいものである。この道は、まことに困難で、つらい道である。しかし付属学校であるからには、この苦しい道をたどることを避けて、安易な抜け途を通ることは、できないのではないかとおもわれる。

### Ⅲ ふつうの生徒をあつめて

高校進学のための小学区制は、多くの府県では実質的に崩壊して、中学区、もしくは大学区ができつつある。このことがいかに惨たんたる試験地獄を生みだしつつあるかは、誰しも眼のあたり直視せざるをえない光景である。いわゆる有名高校をめざして、中学生は骨身を削るようなきびしい受験勉強をする。このために消費される若きエネルギーの量は、はかり知れぬものがある。さて、多くの優秀生を集めた有名高校は、その立地条件を利用して、有名大学向きの受験教育にむかって、足どりも軽やかにつき進むことができる。有名高校の受験水準が高いものだから、大学の入試問題の水準もますます釣りあげられていく。受験生と大学との目もあてられぬ悲惨なイタチゴッコ。これに巻きこまれてクルクル舞いする全教育界の狂騒。ここに浪費されるおびただしい国民エネルギー。なんだか亡国の淵にむかってバク進する列車のような予感さえる。

小学区制の崩壊と有名高校の成立にたいして、私たちは限りなき困惑を感じざるをえない。私たちは、こういう意味の有名高校になりたくはない。よい生徒だけを集めてよい教育をするような高校にはなりたくはない。それはゆがんだ体制の高校なのである。

私たちは、ふつうの生徒をあつめて高い教育をしたい、とねがうのである。よくできる生徒、ふつうの生徒、あまりできない生徒を万遍なく集めて、これにできるかぎりすぐれた力を形成したいのである。できる生徒が下から足を引っぱられることのないように、そして、できない生徒が上へ引っぱり上げられるようにし、せんたいとしてかなり高い水準を結果するような教育をしたい、とおもうのである。

こういう教育が可能か不可能かを、実験してみたいとおもう。私たちの力は微力であるから、十分な成功はあるいは困難かも知れない。しかし、ある程度でもこの教育実験に成功するなれば、目の色かえて有名高校へとひしめく狂騒にたいし、そしてそこから起る中学校教育のゆがみと混乱にたいして、なんらかの救いの光となるのであろう。私たちは、ふつうの生徒をあつめて高い教育効果をあげる、との大きな全体的なテーマのもとに、教育研究をし教育実験をしたいとおもう。このほかにもさまざまな研究なり実験なりが必要であるが、これらは、うへの全体的なテーマのなかの諸脈絡として位置をもち、相互関係をもつことができる。

ふつうの生徒をあつめて、世間一般の標準学級をつくるためにどうしたらよいか。そのためのいちばん適当な実際方法は、抽せんによって合格者を決定することである。この方法は本校ではすでにここ四年間継続して実施してきている。(抽せんという方法がもつ外見的平凡さのゆえに、その背後に秘められている“選ばれた者たちだけの付属校になりたくない”との私たちのねがいが、往々にして顧みられないことは、口惜しいといえは口惜しいしだいである。排他的競争の戦場における勝利者へのあこがれは、現代社会ではこれほどまでに根深いものがある。)

付属中学校への入学は、まったくの完全抽せんである。名古屋市内の小学校の卒業生が、ここ四年間の平均によれば約1,800人あつまる。これにたいしてテストはしないで、抽せんの方法一つで100人近くをえらぶ。このなかにもし知能や性格や身体で特異なものがあれば、それを除くだけで全部合格者とする。したがって能力的には、ほとんど完全にちかい標準学級が二組できあがることになる。

付属高校もふつうの生徒を集めた標準学級である原則に変わりはない。いやむしろ高校においてこそ、標準学級でありたいと考えている。しかし、ここで私たちは、おなじく標準学級といっても、準義務教育としての高校と義務教育としての中学との差異に、当面せざるをえない。中学における標準学級の水準を、そのまま高校における標準学級として移行させることは、妥当とはいえない。高校の教育内容の学習に困難な小部分の生徒は、遺かんながら除外しなければならない。除外すべき生徒数は、ここ数年の例によれば、少部分にすぎない。

そこで当付属高校の合格者は、つぎの手続によってきめた。市内の中学校からの入学希望者は、例年約1,000人になるが、まずこれを抽せんによって約半分の500人にする方法を、ここ数年間とってきた。今後は検査手続の簡素化のために、150人に抽せん決定するつもりである。この外部生徒150人と付中卒業生徒約100人を合せた約250人にたいして、同一の条件で進学適性検査をする。この検査の結果によって、高校進学に不相当と思われる小部分のものを除外する。検査に通った付中卒業生は、全部高校へ進学させる。検査に通った市内中学生にたいしては、抽せんによって、今までの例によれば10余人をえらんで合格者とする。そして付中からと市内中学からとの合格者を合わせ、約100人でもって、高校の二学級を編成するという手続きである。つまり、中学卒業生のごく少数を足切りして、残りは完全な抽せんによって編成した標準学級

である。

#### IV 高い教育をする

付属学校をふつうの生徒で編成するということは、かならずしも容易に踏みきれることではないが、しかしそれは勇気と決断の問題である。ところがこれらの生徒に、すぐれた高水準の教育をしようとするのは、はるかに困難な仕事であり、教育の秀でた知性とひるまぬ努力にかかわる問題である。

では、すぐれた高水準の教育とはどういうことであろうか。教育実際家としての私たちは、これについて働らきの少ない美しい言葉で飾りたくはない。それは「進学・就職 + アルファ」<sup>1</sup>というかたちで、実際的にあらわすことができよう。

進学をよくし就職をよくするということを、私たちは重視したいとおもう。進学・就職をよくすることはわが国の現状では不可避の要請である、とのたんなる消極的理由にとどまらない。高い水準の能力形成は、よき進学・就職と、かなり高い相関度をもって連らなる、との積極的理由からしても、これを重視したいとおもう。しかし進学と就職の率をよくすることにばかりに熱中して、これに直結する狭い知識だけを詰めこむような教育を、私たちはしたくない。この行きかたでは、あるいは進学・就職という手近な幸福はつかみえても、その後の不幸がまちかまえている。

よい進学・就職という手近な幸福だけではなく、進学就職の後にも永く幸福であるような、広く豊かな秀でた能力を生徒に形成したいとおもう。健やかな人間的心情、物ごとを考えようとする英知的な知性、事態のよいありかたを見出そうとする洞察力、人生の真実をもとめ実現しようとする高らかな精神など。こうしたスジガネの通った人間を形成することが、将来の幸福に役立つゆえんである。これがさきへのべたアルファの教育である。

つまり、手近な幸福と将来の幸福。これら二つの幸福をつかむことができるような能力をつけることを、私たちの教育目標としたくおもう。

それでは、こうしてふつうの生徒をあつめてよい教育をするには、どこに指導の重点をおいたらよいだろうか。主要なものとしてつぎの二つの措置がある。

指導重点の第一は、学級および学校のグループ・ダイナミックスを高次にすることである。ふつうの生徒をあつめたときに、だいたい上の生徒、中の生徒、下

の生徒の三群からなる学級集団および学校集団ができてくる。この場合に、(1)集団勢力が下位グループが軸になって構成されて、中位生と上位生が下の方へ引下げられるか、(2)中位グループ軸となって、下位生と上位生がここに引きよせられるか、(3)上位グループが軸となって、残りがこの高い水準に引き上げられるか、の三通りのグループ・ダイナミックスが成り立つ。そのどれであるかによって、教育効果に大きな違いが生じてくる。

私たちはもちろん、上位グループが中心勢力となりその思考様式や行動様式を中位生や下位生が理想とするようなグループ・ダイナミックスを、こしらえることに力を注がねばならない。ともすれば「下の水準で仲よくまとまる」というような本校の無気力な弊風を徹底的に打破しなければならない。そのためには、良い意味における競争がかなり重要である。生徒のなかでのすぐれた思考様式や行動様式にたいして、学級担任の教師は十分な支持を与え、これにむかって多くの生徒が競いあい張り合いつつ、ヒタヒタと迫って行くような、密度のたかい学級雰囲気が必要である。学級のよいグループ・ダイナミックスの形成にたいして、担任教師の一挙手一投足が演じる役割りは、実に大きい。たとえば、まさに結晶しようとする溶液にたいして、その結晶核となるのが教師の一言一行である。

指導努力の第二は、すぐれた教授過程を工夫することである。それにはまず、生徒の学習のつまづきにたいして、どこでつまづいているのか、またなぜつまづいたのかを精査し、それを治療することである。たとえば高校になって英語の不成績な生徒の大部分は、ま

ず中学一年の後期においてつまづいており、しかも発音と書写の不一致や、be動詞の不規則変化などを原因としてつまづいている。つまづいた石の上に、つぎつぎと石を積み重ねられては、誰でもその重みに耐えられなくなるのは当然である。各教科はこうしたつまづきの個所を予めよく精査し、これにたいして、ことに丹念に指導を加えなければならない。また場合によれば、これを取除くための特別な補習授業も必要である。

さらには、実感のこもった理解を形成し、これを生きてはたらく力にまでたかめるような教授過程を工夫する必要がある。このためには、生徒の理解過程ないしは認識過程をよく把握し、このプロセスにそくした教授過程をとるようにしなければならない。いわゆる論理整然と指導することは、かならずしも生徒の認識過程に即しているとはいえない。生徒の認識過程は多くの場合、ちぐはぐな拙いものである。その一般的な原則過程としては、(1)最初はバクセンと未分化に全体をとらえる。ちょうど淡モヤのさ中に立ってあたりを見廻しているような具合である。(2)つぎには、この淡モヤがしだいに晴れていき、いろいろな物事やその相互関係がみえ出すにつれて、分析と総合によって物ごとの本質をしっかりと把握する。(3)そして最後にはこの把握を実際の場合で使用することによって、自分の身についた力となり、生きてはたらく力となることができる。こうしたしだいで、認識過程は多分に心理的である。心理を踏んまえた論理といった線で、中等教育の教授過程を工夫したいものである。すぐれた能力形成は、すぐれた教授過程によってできるといっても過言ではない。